

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 紫式部は「まひろ」か？

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 正彦, Takeuchi, Masahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001583

紫式部は「まひろ」か？

竹内正彦

紫式部は「まひろ」なのですか？

昨年(二〇二四年)、あるところで受けた質問にそのようなものがあつた。折から、紫式部を主人公としたNHK大河ドラマ「光る君へ」が放映されており、その紫式部のドラマ内での本名が「まひろ」なのであつた。この「まひろ」をめぐる虚構性については、やはり昨年、一般の方にむけて紫式部や『源氏物語』のことをお話しするなかで幾度かふれたことがある(竹内正彦「講演録」『紫式部と源氏物語』『温故叢誌』78など)。言うまでもなく、紫式部の本名は未詳である。「藤原香子」とする説もあるが推測の域にとどまる。古代においてとくに女性の本名は重要なものであつたため、貴人に仕える際には女房としての呼び名が用いられたのであり、紫式部の場合も「藤式部」と呼ばれていたとされる。彰子や定子等の場合も、どのように訓んだのが不明であるため、やはり本名はわからないといつてよい。ドラマがあえて架空の本名を用いたり、訓読みを採用したりしたのは、それによつて、史実から離れた虚構の世界であることを示そうとしていたのかもしれない。

大河ドラマに関わる質問としては、紫式部と藤原道長との関係についてのものもあつた。これもドラマのなかでふたりが親密な関係(設定では「ソウルメイト」として描かれていたことをふまえてのものである。たしかに『尊卑分脈』では「御堂関白道長妾云々」という注記が見られるが、それを全面的に信用することはできない。『紫式部日記』には紫式部と道長との贈答があり、その夜、紫式部の部屋の戸を叩く男の記事が記されているが、その男が道長であつた保証はない。また、たとえ主従の関係にある男女であつても和歌の贈答が恋歌の体裁をとることは通常のことであり、『尊

卑分脈」等の記事は、むしろ、そうした『紫式部日記』の記述から推測したものと見ることもできる。

先の質問にそのように答えると、でもふたりの間には女子（賢子）も生まれていないのではないかの指摘もあった。それはドラマならではの虚構であることを説明したものの、NHK大河ドラマというもののもつ影響力の強さを感じた。私もドラマは楽しく視聴していた。ところどころにはさみ込まれる『源氏物語』をふまえたエピソードはもろんのこと、史実をも素材のひとつとし、虚実をない交ぜにしながらドラマ独自の世界を作りあげていくその手法には感心させられた。考証をふまえた衣装や室礼等が映像として映し出されることも興味深いものでもあった。

そうしたなかで私がとくに注目していたのは、どのように『源氏物語』が書き出されるかということであった。「まひろ」が紫式部であるかぎり、その場面はこのドラマの肝となるはずであった。そしてそれは第三十一回「月下の下で」において描かれた。ひらひらと舞い落ちてくる和歌などの書かれた色紙につつまれながら、「まひろ」は、ついに「桐壺」巻の冒頭を書き出したのであった。感動的な場面であった。『源氏物語』をふまえたエピソードもここに収斂するよう織り込まれていたことも了解された。なるほどドラマのなかの「まひろ」は紫式部であった。けれども一方で、私のかには何か釈然としない思いも残った。それは、私とその光景に、まことに勝手なことながら、膨大に蓄積された情報に基づいて作品を生成していく人工知能のようなものを連想してしまったためであった。

折口信夫は「ものとは、靈の義である。靈界の存在が、人の口に託して、かたるが故に、ものがたりなのだ」とした（『大和時代の文学』『折口信夫全集』5）。物語は靈物に取り憑かれたかようにして生み出されていくものではなかったか。そしてそれは作者が個人的に体験したことや書籍等で知り得たことなどを越えて紡ぎ出されていく、「ものぐるほし」き営みではなかったか。

ドラマを視聴した後、『源氏物語』の本文を味読すると、この物語を生み出したものが「まひろ」ではないことがあらためて実感される。

紫式部は「まひろ」ではない。そのことは『源氏物語』という物語を考えるうえで、とても大切な示唆を与えてくれるように思われる。